



さらに他の症状をチェックする過程で患者の手に触れると、冷感があり湿っていた。様々な要因が頭に思い浮かんだが、持参薬に注目。約1週間前にぎっくり腰になった患者は、非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs)を多用していた。NSAIDs潰瘍による循環血液量減少性ショックを疑った東氏は看護師に連絡。血圧を測定すると、脈拍数が収縮期血圧を上回っていた。すぐに手術中の主治医に連絡。出血性胃潰瘍との診断が下され、迅速に対処できたという。

「自分の考えを医師や看護師に素早く適切に伝え、行動に移すことができた。臨床推論のスキルを使って患者のアウトカムを良い方向に変えることができた」と東氏は振り返った。

そのように診断したのか、薬は効いているのか、患者の容態は良くなっているのかなどを判断するのに活用できる。前向きにチームで議論するための最低限のツール」と語った。

その上で岸田氏は「臨床推論を駆使し、チーム医療の一員として前向きに発言できる薬剤師が日本でも必要不可欠。きちんと体系的に学ぶ場が必要」と指摘した。



東氏

東加奈子氏(東京医科大学病院薬剤部)は、臨床推論を活用し、患者の症状に適切に対処した事例を提示。

事例は、吐き気、食欲不振、ふらつきを訴え、経口抗癌剤「TS-1」の副作用を疑って入院した71歳男性、胃癌患者。持参薬確認のため東氏はベッドサイドに向向き、TS-1の副作用かどうかを評価するため、症状の発現状況を具体的に聴取した。

臨床推論の活用に焦点

くことが重要なのか、意図的に話を聞けるようになる。それが共通言語になって、医師や多職種とのコミュニケーションが円滑になるという。

海外でも「看護師が臨床推論を駆使して診療の質を向上させられると報告されているが、病院薬剤師の実

践例もある。世界的にもこれからの領域。日本の薬剤師が臨床推論を実践していくのは、必ずしも遅いことではない」とした。

医師の岸田直樹氏(手稲溪仁会病院総合内科・感染症科)も「診断のためだけにあるものではない。なぜ医師が

9月21、22日の2日間、仙台市で開かれた第23回日本医療薬学会年会のシンポジウム「これからの病棟薬剤師業務～患者のために、臨床推論のできること～」で、主に医師が診断に活用する「臨床推論」という思考プロセスを、薬剤師がどのように業務に取り入れていくかが焦点になった。臨床推論への薬剤師の注目度は高く、立ち見が出るほど盛況だった。

日本医療薬学会年会

川口崇氏(東京薬科大学医療実務薬学教室)は臨床推論について「患者管理に必要な意思決定のための思考プロセス」と説明した。



川口氏

臨床推論は、主訴や自覚症状、フィジカルアセスメント、検査所見などから病気を診断するスキルとして医師が活用している。さらに、医療スタッフが医師に相談するかどうかを意思決定することも含んでいる。そのスキルを薬剤師が習得すれば、患者から何を聞

日本薬剤師会学術大会

を決める方法で良かった。だが、不安定な近年では、教養と野生が重要になる」と断言。

「大人は、人間のコミュニケーションが、携帯電話では絶対に築けないことを子どもに教える必要がある。感性は、自分の力でしか磨けない。その一方で、子どもが憧れを持った職業に就ける社会を確立しなければならない」との考えを示した。

さらに、東京大学名誉教授の立場から、「東大の入学式には、たくさんの父兄が参加する。だが、東大出身者が社会や国を引っ張っていくには、まず、お互いに自立した親子関係を築くことがその第一歩になる」とした。

一方、薬剤師に向けては、「それぞれの責任を果たしていかなければならない」と指摘し、「そのためには、“挑戦する勇気”“自分の世界を切り開く勇気”と共に、私は誰にも負けないという“自信”が必要になる」と訴えかけた。

建築家の視点からメッセージ

安藤忠雄氏



第46回日本薬剤師会学術大会記念講演では、大阪出身の世界的建築家の安藤忠雄氏が建築家の視点から、「薬剤師が元気になるには、挑戦する勇気と絶対的な自信が最重要ファクターになる」とのメッセージを贈った。

講演の中で安藤氏は開口一番、「わが国の医療も建築技術も世界一である」と明言し、「これからの仕事は感性が重要になる。日本には四季があり、感性を磨く環境が整っている」と訴えかけた。

安藤氏は、現代の偏差値教育にも言及し、「終身雇用制度が確立された安定した時代は、偏差値で人間のレベル

iPS由来心筋シートによる重症心不全治療に期待

大阪大学大学院医学系研究科 心臓血管外科

澤 芳樹教授



近年の循環器医療の進歩にかかわらず、重症心不全に対する治療体系は未だ確立されていない。このような現況の中、澤芳樹教授(大阪大学大学院医学系研究科心臓血管外科)らのグループは、重症心不全患者に対する治療として、世界に先駆けて足の筋肉由来の自己筋芽細胞シートや、iPS由来心筋シートを用いた心筋再生治療の研究に取り組んでいる。

自己筋芽細胞シートを用いた成人の拡張型心筋症(DCM)治療は、治験が終了、いよいよ臨床応用段階に進み、小児DCMの臨床研究への展開を見せている。iPS由来心筋シートを用い

た高機能バイオ心筋の開発も、近未来の臨床応用を目指している。これらの研究には、薬学系の人材もたくさん活躍しており、最先端医療の推進も薬剤師の新しい使命の1つとなっている。

2000年から東京女子医大・岡野光夫教授との共同研究で開発された自己筋芽細胞シートは、これまで17例の重症心不全患者に移植され、重症心不全の心機能や症状を安全に改善することが証明されている。

一方、自己筋芽細胞シートで効果がない心筋損傷度の大きい患者には、iPS由来心筋シートを用いて直接的に心筋細胞を再生するiPS心筋再生治療の研究が進められている。同研究は、昨年の山中教授のノーベル賞受賞により、より一層拍車がかかっており、3～5年後の実用化が期待される。



マツキヨが目指す先

地域医療と連携した「かかりつけ薬局」を推進していきます。

☎0120-047-300
<http://www.r-matsukiyo.com/>

株式会社 **マツキヨ** ホールディングス
<http://www.matsumotokiyoshi-hd.co.jp/>

あなたにとっての、いちばんへ。
1st for You.